平成24年度　学校自己評価表（年度当初）

中長期目標 （学校ビジョン）	「倉吉東高のかたち」の理想に沿った様々な教育活動を充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。

今年度の 重点目標	1　主体的学習者の育成 2　積極的な活動の育成 3　進路指導の充実 4　広報連携力の強化 5　専攻科教育の充実 6　定時制教育の充実

年度当初					評価結果		
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1. 主体的学習者の育成	文武両道と規律ある生活による自立の促進	・学校の中が品位ある言動に満ち、落ち着いた雰囲気が感じられる。 ・生徒自身が環境整備や規律徹底に向けて主体的に行動している。 ・全員が部活動に加入し、部活動が日々の学習の下支えとなるような主体的、積極的な活動となっている。 ・教職員に「率先垂範」の意識が浸透し、協働性のある指導ができる。	・気持ちのよい挨拶ができるようになったが、計画性のない行動や服装違反が一部見られる。 ・周りに気配りができず、環境整備や規律徹底に向けて協同性を発揮できない生徒がいる。 ・部活動の加入率は高いが、高い目標を持ったけじめある練習や部室管理がうまくいっていない部がある。 ・生徒に自ら範を示し、生徒の心に火をつけようと努力している職員がいる。 ・具体的項目の実現に向けてアンテナを高くして分掌学年の仕事を推進しようとしている。	・気持ちのよい挨拶や服装を整えることなどがなぜ大切なのかを説明するとともに、指導7項目の遵守を徹底するよう、時期を逸せず全職員で指導する。 ・生徒の主体的な活動を組織し、生徒会執行部や環境委員を推進役とし、環境整備、規律徹底を推進する。 ・部室管理や部活動時間の遵守を顧問と協力して推進し、部活動と学習の両立を図る。 ・分掌、学年が協働性を発揮しながらそれぞれの任務を遂行することで、担任の生徒との面談時間を保障し、担任が生徒指導に全力で向かえるようにする。 ・分掌再編の取り組みを定期的に検証し、課題を発見した場合は分掌、学年が柔軟に対応して速やかに適切な対処を行う。			
	「協同的な学び」の研究推進	・教員一人ひとりが、高い教科指導力を持ち、授業を通して各教科の魅力や奥深さを生徒に伝えている。 ・テストや大学受験といった実利的目的を越えて、生徒の学びが真理探究といった高次なものとなるよう指導が行われている。 ・生徒の進路希望や発達段階に応じて、教員が集団として時宜にかなった教科指導を行っている。 ・「協同的な学び」をはじめとした、指導力を高めるための教員研修が積極的に行われ、その成果が日々の学習指導に還元されている。	・生徒の学習が内発的・主体的なものへ高まっているとは言えない部分がある。 ・生徒の学習が課題提出やテストなどに追われている傾向が依然としてある。 ・生徒個々の進路志望や発達段階に応じたきめ細かい教科指導を教員集団全体として十分に行えているとは言えない部分がある。 ・教員研修の成果が日々の学習指導に十分に還元されていない。	・年度の初めに「協同的な学び」に係わる先進校教員を招聘し、教員を対象に理論と概要について研修の場を設け、理解と意識の向上を図る。 ・重点教科を設け、先進校教員との示範授業・研究授業・授業研究会を通して指導力の向上を図る。（国・英・理・体） ・アドバイザーを委嘱し、中間評価・最終評価をはじめ年間を通して本校の取り組み全般の改良改善を図る。 ・実態把握のできる分析・評価法を研究し実践する。 ・「協同的な学び推進チーム」のミーティングを適宜行い、計画の進捗状況を確認するとともに、分析と評価を行い、課題の解決を図る。 ・教科専門研修に積極的に参加し、その内容を教科内あるいは全職員で共有し日常の授業で活かす。 ・「協同的な学び」通信を適宜発行したり、教務室に関連図書を常設するなどして啓発を行う。			
2. 進路指導の充実	OJTの充実と進路指導力の向上 ※OJT オン・ザ・ジョブトレーニング	・進路指導に関する必要な情報を提供したり、研修の場を設定することにより、全職員が進路指導に関わろうという意識を持ち、適切な知識や技能を習得している。 ・生徒が「学力＝生活力」であることを自覚し、その意義が「今・自分・依存」から「未来・社会・貢献」へと開かれるような、生き方指導を行っている。 ・生徒の志望や適性を理解した上で、望ましい将来像を示しながら、3年間のどの段階においても適切な指導を行っている。	・知識や技能に個人差があり、進路指導が担任など特定の教員に偏る傾向がある。 ・多くの生徒が適切な目標を立て、望ましい進路選択を行っており、意識が「受験学力」を高めることのみにとどまってしまう傾向が一部に見られる。 ・進路研修会等様々な場面を設定しているが、進路指導の知識や技能をうまく伝承しているとは言えない。	・担任を中心に学年部が一体となって進路指導に当たる。 ・学年を中心に学習時間・模試結果・志望など生徒に関する情報を綿密に分析し、そのデータを学校全体で共有しながら、データ活用能力を高める。 ・様々な場面で「倉吉東高のかたち」を引用し、生徒・保護者への本校教育理念の浸透を図る努力をする。また学校訪問対応や中学校での説明会等で外部への広報・発信も行い、説明能力を高める。特に生徒に対しては、学校行事や部活動などでも、「倉吉東高のかたち」について考えさせ、自らを高め、社会に関わろうという意識を高める工夫をする。 ・研修会などの特別の場面のみでなく日々の取組が自己を向上させるということを理解し、自主的に学ぶ姿勢を持ち、進んで進路指導力を高める努力をする。			
	中堅・難関大学合格者数の発展	・地域を代表する進学校としてふさわしい実績を維持し、向上が期待できる。 ・現役合格者数150名以上。 ・中堅大学レベル以上合格者数70名以上。 ・難関大学合格者現浪合計20名以上。 ・東京大学5名。	（現役合格） ・H23年度145名。H22年度157名。H21年度175名。 （中堅大学レベル以上） ・H23年度66名。H22年度67名。H21年度83名。 （難関大学） ・H23年度21名。H22年度16名。H21年度33名。 （東京大学） ・H23年度3名。H22年度6名。H21年度4名。	・すべての生徒にCT（センターテスト）に対応できる学力をつける。 ・年度当初から継続して志望校指導、受験校指導を行う。 ・2次試験に必要な力をつけるために、グレードに合わせた補習の在り方を工夫する。 ・OB・OGや専攻科生に接したり、県内外での難関大合宿などに参加することで、目標に対する決意を確固たるものにできるよう指導する。 ・文理学術クラスを名実ともに学年のリーダー的クラスに成長させるため、学力だけでなく人間力の面でも学校全体で一貫した指導を行う。 ・東大の入試問題を研究し、前年度の結果をデータとして活用する。			

評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	次年度の改善方策
3. 積極的な活動の創成	活動創成と人間関係力・社会的自己実現等、育成したい生徒像の具体化	・各学年にリーダーシップのとれる生徒が一定量おり、その生徒を他の生徒が積極的に支えようとしている。 ・生徒自身が社会に関心を持ち、社会的課題に対して主体的にアプローチしている。 ・各生徒が自己肯定感を持ち、他生徒に対して敬意を払いながら、協同してよりよい環境を作ろうとしている。 ・自分や社会の将来について先見性を持ち、それに必要な力を自覚し、主体的にその力をつけようとしている。	・リーダーの資質を持っている生徒は少なくないが、まだその資質を十分に発揮できていない面もある。 ・自らを中心においた関心の同心円が、広がっていかない生徒がいる。 ・自らの持つ資質に自信が持てないまま、学校生活に消極的になっている生徒がいる。 ・現在における自分の状況や感情にとらわれ過ぎて、やるべきことの優先順位を見極められない生徒がいる。	・生徒会活動をより活性化させ、学園祭や国際高校生フォーラムなどの行事を通し、リーダーシップを発動できる場面を数多く設定する。部活動においては適切な目標を立て、計画的で活発な活動ができるようにする。 ・学園祭におけるプレゼンテーションコンテストの内容充実や、ボランティア活動の自主参加の拡大を図り、より広い社会へとつながっていけるようにする。 ・生徒会行事や部活動、クラスの係活動などを通し、自らの役割を果たす喜びを感じさせる。 ・学園祭や国際高校生フォーラム等の学校行事を生徒自らの手で計画、準備、運営させて行くことにより、見通しや段取りを大切にする態度を育む。			
4. 広報連携力の強化	積極的な広報活動による地域や中学校からの共感の促進 育友会・同窓会との連携促進	・各中学校に本校の教育方針や教育内容が十分理解され評価されている。 ・本校が各中学校の実態を十分理解している。 ・生活指導・学習指導について、中学・高校の連続性がある。 ・中学教育を支援するため、本校が持つ資源を積極的に提供している。 ・本校の進路指導や大学の現状に対する保護者の理解が深い。	・本校の教育方針・教育内容・生徒指導などについて、中学校教員や生徒、保護者の理解が不十分な点がある。 ・管理職だけでなく、多くの教員が中学校訪問を行い、本校の教育について説明をしている。 ・倉吉東中学校と「スクラム教育推進事業」を行い、英語・数学における連携を深めている。 ・中学生特別講座を実施し、中学レベルを超えた英語力の育成を支援している。 ・「中部地区小中学校・高等学校連携推進事業」によって英語・音楽・体育の教員派遣を行っている。 ・保護者に対しては、8月、2月の進路講演会の他、11月に大学見学会を実施して、情報提供を行っている。	・本校のHPを通じて、教育活動の様子を適切に外部へ情報発信できるよう努める。 ・中学生を対象とする高校説明会を充実させ、本校への進学意欲を高める。 ・中学校主催の説明会や進路学習の機会を利用して、教員が積極的に中学校に出向き、本校の理解が深まるよう工夫する。 ・本校へ学校訪問等に来られた外部の方への説明を、キャリア形成部や企画推進部以外の教員も行い、本校の取り組みを外部に発信する能力の向上に努める。 ・倉吉東中学校との「スクラム教育推進事業」を充実させるとともに、中部地区全体の中高連携を促進する。 ・中学生英語特別講座への参加拡大を促進すると同時に、中学教員の参加（参観、ティームティーチングなど）を呼びかける。 ・中学校出前授業に積極的に応じる。 ・保護者対象の進路講演会や大学見学会への参加者を増やすとともに内容を充実させ、保護者の理解を深める。			
5. 専攻科教育の充実	予備校との差異化と適正な進学実績の維持 閉科後の備え	・昭和36年に専攻科が設置された意義を理解し、感謝の気持ちを持つとともに、学問に対して誠実に主体的に取り組むことによって、公共の利益に資する精神を涵養している。 ・受験勉強を超えた学びの本質に触れ続けることにより、個人的自己実現から社会的自己実現の学習へと深化している。 ・専攻科生が「主体的な学習者」としての姿を見せることにより、現役生をリードしている。 ・専攻科全体でのセンター点の伸び平均が100点を超え、難関大合格10名、国公立合格50名となっている。	・生徒は感謝と公共の精神の大切さについて理解しており、校内では挨拶や清掃活動、現役生への進路チュータリングなどの活動に積極的である。しかし、地域社会で評価されるまでには至っていない。 ・受験学力をつけるだけでよいと考える生徒はおらず、社会的自己実現を志向する意義を理解しているが、社会経験に乏しく、本当の力がついているとは言えない。 ・現役生への「進路チュータリング」や「学び祭り」のプレゼンなどで専攻科生の取組を伝えているが、十分とは言えない。 ・例年より幅広い学力層の生徒への指導が必要である。	・専攻科で学ぶ意義について折に触れて説明し、専攻科が単に大学合格だけを目指すところではなく人間力を高める場であることを理解させる。 ・自主的なボランティア活動への参加を促すとともに、地域との交流など校外行事を計画し、地域社会と直に接することにより「役立ち感」を体験させるなど社会貢献を志向する態度と肯定的自己概念を育成する。 ・従来から実施している「学び祭り」を充実・発展させ、発表テーマの設定・研究及びプレゼンテーションの内容を深化させる。（INPUT学習からOUTPUT学習への転換） ・県立図書館・学校図書館との連携を図り、あらゆるジャンルの書籍の読書をすすめていく。 ・3年生との合同課外を実施し、互いに刺激を受けながら学び合うようにする。（専攻科2，3年生6の計8クラスの受験生の集団化） ・現役生への進路チューターや出向授業を行い、自身の取り組みを振り返るとともに「学ぶ者」としての範を示す。 ・早朝学習と休日の校舎開放を行い基本的学習習慣を確立するとともに、面談を充実し適切な目標設定のもとに着実に学習に取り組めるようにする。 ・専攻科OB・OGを招き講演会を開など、生徒の意欲を喚起する工夫をする。			
6. 定時制教育の充実	積極的な生徒指導 進路保障と学力の向上	・自己の進路目標を決め、その実現のために積極的に学習や行事等に取り組んでいる。 ・課題に真面目に取り組み、提出物の期限が守られている。 ・わかりやすい授業と個々の実態に応じたきめ細かい指導がなされている。 ・生徒が心身ともに健康で、規律とけじめのある基本的な生活習慣を確立している。	・3年生19名のうち進学希望が8名、就職希望が11名であるが、まだ、自己の将来像を描いたり、進路を決めることが難しい生徒が多い。 ・中学校で不登校経験を持つ生徒や、進路変更で転編入した生徒が多く、まず登校しレポートを提出することの指導が必要な生徒が多い。 ・基礎的な学力が不足しているために、理解するのに時間がかかる。 ・生活環境面などで問題を抱え、積極的に学習に取り組めない生徒が少なくない。	・ハローワークやキャリアアドバイザーとの連携を密にし、正規採用を増やす。 ・卒業生等との座談会や進路講演会を効果的に取り入れ、進路意識の向上を図る。 ・特別支援の必要な生徒の個別指導や、進路に対応した課外・添削指導を工夫する。 ・積極的に面接や家庭訪問を実施して生徒一人ひとりのおかれている生活状況等を把握し、保護者と連携して進路実現に向けたきめ細かい指導を行う。 ・定期的に情報交換会を持ち、生徒個々の状況を職員間で共有して連携した指導を行う。 ・授業公開・授業研究への参加者を増やしたり、他校視察をして授業改善に生かす。 ・夏季休業中に登校日を設定し、長期休業中の生徒理解・指導に生かす。			

○ 評価基準

A 本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80%以上になっている。

B 課題はあるが、改善に向けた取り組みが効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、60%～80%の範囲内になっている。

C 課題を解決するにはまだ多くのステップがある。一定の成果はあがっているが、さらなる努力が必要である。数値目標を掲げた項目では、40%～60%の範囲内になっている。

D 改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。依然として課題が多く、今後の改善があまり見込めない。方策の全面的な見直しが必要である。数値的目標を掲げた項目では、最高でも40%未満である。